



JIC インフォメーション

第 161 号 2010 年 2 月 10 日

年 6 回 1・2・4・6・9・11 月の 10 日発行

1 部 500 円

発行所: JIC 国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<http://www.jic-web.co.jp>

東京オフィス: 〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7F

TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪オフィス: 〒540-0012 大阪市中央区谷町 2-1-22 フェアステージ大手前ビル 5F

TEL: 06-6944-2315 jicosaka@jic-web.co.jp

ロシア・旧ソ連 国際交流誌



JICのHPを
チェックしてね!



2010 年本格稼働の列車「サブサン(はやぶさ)号」

640 キロ離れたモスクワ-サンクトペテルブルグ間を 3 時間 45 分で結びます!

「ロシア留学のすすめ - ことばの環境・ことばのカー」
JIC ロシアセミナー講演録(大阪) 林田 理恵・・・2-4P
「過去へのまなざし、未来へのアプローチ
～現代ロシアの人気作家たち」
JIC ロシアセミナー講演録(東京) 沼野 恭子・・・5-8P

〈連載〉「エクメネの最果てへ」- サハ共和国 冬の旅 -
岡本 健裕・・・9-11P
ロシア情報・・・12-13P
ペンパル情報・・・14-15P
JIC 情報・・・16P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会) 会員を募集しています。
年 6 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

JIC ロシアセミナー講演録 1 (2009 年 11 月/大阪)

「ロシア留学のすすめ -ことばの環境・ことばの力-」

林田 理恵(大阪大学教授)

昨年 11 月に行われた JIC ロシアセミナー。大阪会場では、大阪大学教授・林田理恵先生に講演をしていただきました。今回はその講演の前半部分をご紹介します。

はじめに

つい先日、ほんの 10 日ほど前に「現地滞在正味 2 日半」という凄まじい日程でサンクトペテルブルグに行ってきました。その前の 9 月にもモスクワに 10 日間ほど行ってきたのですが、それが実に 8 年ぶりのロシアでした。わずか 10 日間でしたが、それは「ことばの環境」という点で、「ものすごい力を持っているな」、「現地にいるというだけですごく大きな力を持っているな」と実感した 10 日間でした。その後のたった 2 日半も大忙しの日程でしたが、「また何かが変わったな」という感じがありました。今日は、留学経験がすでにある人もいるし、これから行ってみたいと考えている人もいるでしょうが、皆さんに留学がいったいどんな力を持っているのだろうかということをお話したいと思います。



「どうして留学するの？」

ではまず、なぜ留学するのかということと一緒に考えてみたいと思います。どうですか？ もう留学に行ってきたか？ 留学の動機はどんなものでしたか？

(参加者)－「ソ連が解体したあと、だいぶ経っていますが、ほとんど情報が入ってこないの、自分で確かめてみたいという気持ちがありました」

情報が外に出てこないってことです。もうひとり聞いてみましょうか。どうですか？

(参加者)－「モスクワに 10 カ月留学していましたが、きっかけは日本で勉強するのに限界があるな、と思ったので。」ありがとうございます。私も皆さんが考えているような動機をいくつかレジュメに挙げてみました。私は元大阪外国語大学、今は合併して大阪大学になっていますが、その言語文化研究科に所属し、また外国語学部でもロシア語を教えています。外国語学部の学生の中には当然留学希望者がいます。やはり留学の一番大きな動機は、「ことばを話せるようになりたい」ということだと思うのです。それから「外国の生活がしてみたい」、また「外国の文化に触れてみたい、知りたい」ということもあります。最初に答えていただいた方の内容がこれに近いですね。さらに「自分のやりたい勉強がその国でしか

できない」という、ことばからではないアプローチもあります。たとえば音楽の勉強など、ロシアは非常にレベルが高いですし、最近ではバレエ留学をする人も増えています。それ以外にもいろいろな理由があると思いますが、「生活するために」、「その国の文化を知るために」、「自分のやりたい勉強をするために」と、どれをとってみても「ことば」というものは欠かすことができません。ことばがまったくゼロの状態での国に行っても、ほとんど情報が入ってきません。正確にはことば以外でもいろいろな情報は入ってきますが、やはりことばを通じて入ってくる情報とそれ以外では量的に大きな差があります。「ことばの力」というものがどんなアプローチをする場合でも大きく関わってきます。現地で暮らすことや留学することが、ことばにとってどのような関わりを持っているのか、私の専門の言語学の分野から話してみたいと思います。

「ことばって何？」「ことばの意味って何？」

「ことばって何？」ということですが、何だと思いませんか？ 抽象的な質問で、少し難しいですが、どうでしょう？

(参加者)－「人と話すときにつかうもの、…」

何のために人と話すときに使うのでしょうか？

(参加者)－「ことばがないと不便だし、気持ちが通じないから」

そうですね。自分の思いを伝えたい、考えていることを伝えたい、生活していく上で自分はこうしたいということを伝えたい、相手の考えを分かりたいということがありますよね。

ではどういう風にことばは成り立っているのかということですが、どうでしょう？ レジュメには「単語＋文法規則？」と書いておきましたが、どう思いませんか？ これは、ことばをどうやって学習したらいいのかという話につながっているのですが、とりあえず単語が分かっている、文法規則が分かっていることが肝心だと思いますか？

(参加者)－「そうですね、とりあえずは単語と文法規則は大事だと思います」

そうですね。では、「単語＋文法規則」があっても、それがコミュニケーションの手段となるということは一体どういうことなのでしょう？ どうしてコミュニケーションできるのでしょうか？ 話が抽象的になっていますが、分かりやすく言うと、例えば



私がここで話していて、「質問に教えてください」と投げかけます。すると、「そんな訳の分からないこと聞かれても分かりません」という答えが返ってきたとします。これはかなりなディスコミュニケーションですが、とりあえず私が投げかけた質問に対して答えが返ってきました。ではなぜそういう風に答えが返ってくるのでしょうか？ 何らかの答えが返ってくるということは、私がこうして話していることばの一つ一つは意味を持っていて、皆さんがその意味を理解しているからですね。

そこで次に、「ことばの意味って何？」ということを考えていると思います。だんだん難しくなってきました。どう思いますか？ ことばの意味って何でしょうか？

(参加者)－「表したい事象などを外へ表現するためのものとか…」

自分が伝えたい気持ちだとか出来事が音と結びついているということですね。ですがちょっと考えてみてください。例えば昨日の出来事を友達に話すとします。「昨日、生協食堂にすごいイケメンの子がいたよ」とか。自分の中に昨日のイメージがあって、それを話すことによって相手にことばを發します。どうして相手に伝わるのでしょうか？

ことばを使ってコミュニケーションするということを、そこで何が起きているのかということをもひも解きつつ考えてみたいと思います。まず自分が持っているあるイメージを、ことばという記号に変えて外に出します。ですが、相手は受け取る側のイメージで受け取ります。例を挙げましょう。例えば「火事だ！」と言われて描くイメージは人それぞれだと思いませんか？ 4、5 年前の話ですが、山に小さな別荘小屋がありまして、山の中にゴミ処理車は来ないので、ゴミは自分たちで焼いたり埋めたりして処理しなくてははいけません。それで、



紙とか生ごみを焼いていたのですが、何が起ったと思いますか？ 実は消防車が来てしまっ、その上新聞社のヘリコプターまで

飛んできました。近くを通ったどこかのおじいさんが火事だと思って消防署に電話をしたらしいのです。どうもその年は山火事が多かったそうで、おじいさんにしてみればまた山火事だと思ったわけです。どうしてこんな事が起きたのかというと、イメージの違いなのです。同じ煙を見ても、焚き火だと思うか、ゴミを焼いていると思うか、あるいは火事だと思うか、受け取る人によってイメージが全く違います。これは、普段当たり前に通じていると思っている日常のコミュニケーションが、実はいろいろなところでズレているということを示す極端な例です。結局、自分があることをイメージして發することばや単

語について、それを受け取った人とイメージが完全に一致するということはまずありません。もうひとつ例を挙げます。

「昨日川で釣りをしました」という話をしたとします。私は昨日



実際に行った川を思い浮かべ、自分がした釣りをイメージします。ところが話を聞いた人は自分の経験でそのイメージを再構成します。もしかしたら私は家の前の幅 1 メートルもないような小川で小

さなゴリを釣ったのかもしれませんが、それを聞いた人は淀川くらい大きな川、あるいは岐阜の山奥の溪流で大きな魚を釣ったのかなと思うかもしれません。そこで、人それぞれにイメージが違っていて、どうやってコミュニケーションをとればいいのか、という問題になります。

ここで言語学の話に戻ると、結局、あることばにあるイメージを結びつけるということは、ある程度の約束事の上に成り立っているということが言えます。約束事というのは、例えば、「川」といえば「水が流れていて、何か生き物が泳いでいるような感じ」といった非常にアバウトなイメージを共有することです。辞書できちんと決められているわけではありませんが、私たちが集団として生活していく中で、「こういう音声の羅列はこういうイメージを表している」というような約束事をお互いの了解の中で作っているわけです。

「まとめる」ことで意味が伝わる

ところが、人の生活は刻一刻と動いています。「以前にも同じことがあった」、などとよく言いますが、実際には「同じこと」は決して起こりません。「似たようなこと」はたくさん起こりますが、全く同じことは二度と起こりません。一瞬一瞬時間が経っていくことによって無限大の現象が連鎖しているのです。例えば「本」。世の中には無限大に近い数の本が存在しています。けれども、「本」という名前が括れる集合体があります。では、本はどうして「本」というのでしょうか？ 何を手掛かりに「本」という名前を付けているのでしょうか？

(参加者)－「本の機能を知っていて、その機能があれば本ということでしょうか」

そうですね、機能。一番特徴的な機能が備わっていれば、とりあえず名前を付けてある集合体を括るという作業を、私たちはことばという世界の中でやっているわけです。4 本の足が付いていて上に台が乗っていて、その上で作業ができるものを「机」と名付けるとか。机だって無限大に近い数の机が存在していますが、ある機能に基づいて「机」と括られています。何故そういうことをやっているのでしょうか？ 悲しいかな、人間の記憶能力には限界があります。例えば、これは「机太郎」、これは「机花子」と、無限大にある机の一つ一つに仮に名前を付けたとしたらどうなるでしょう？ まず記憶がパンクします。それともう一つ。すべて同じ経験をみんなが共有しているわけではありません。私が特定のこの机の

角に足をぶつけたというような経験でもって、この机に一つの名前を付けて、「いや～。昨日、机太郎の左のあの角に足をぶつけてね、…」などと言ったとしても誰も理解できません。同じようなイメージを他の人にも持ってもらうと思えば、似たようなものを一括りにして、アバウトな名付けをすることが、コミュニケーションをとる上でとても大事になります。つまり、私たちはことばを使って、ある事物を「まとめ」、似ているところや特徴的なところに着目して一般化し、体系化するというをやっているわけです。そうすることでお互いが理解し、コミュニケーションすることができるのです。

ここで一つ問題があります。人は自らに関わりの深いことは詳しく、関わりの薄いことは大雑把に名付けるということを無意識にやっています。典型的な例を挙げましょう。私たちは自分の身近な人たちを「男、男、男、女、女・・・」とは言わないですね。机には名前を付けないけれど、自分の周りの親しい人は固有名詞として個々の名前とともに認識しています。ところが自分に関わりが深くない人になると、それはたちまち男・女だとか、学生とかいう名前になってしまいます。また、家で飼っている犬や猫は「うちのポチ」、「うちのタマ」になりますが、例えばその辺を這っているアリはただのアリ、ハエはただのハエでしかありません。ごく稀にアリやハエに名前をつける人もいるかもしれませんが、ちょっと不気味ですね。要するに、自分に深く関わっている部分を他から区別する必要にかられるほど、私たちは詳しく名付けをするということです。

レジュメに「少数の表現形式を、似ていることをたよりに多くのものや事柄に拡張」と書いてあります。これは言語学でよく使う「メトニミー」という概念です。人間の体を表すことばはメトニミーに一番適していると言われています。例えば口という言葉はものすごくたくさん意味で使われています。仕事口、入口、出口、それからガマ口なんてのもあります。似たものを同じ名前で一括りにし、それをいろいろなものに拡張しているのです。

文化が異なると、ことばの意味やものの見方も異なる

このようにことばを使ってまとめる作業をいつもやっているとそこから何が起こってくるのか？ ここからが今日の話の核心です。つまり、関わりが深い部分に関しては詳しく、そうでない部分については大雑把になると、暮らし方が違う、もっと大きくいえば文化が違っていると、ことばのまとめ方も違ってくるのではないかという問題が起こってきます。例えば農耕文化と牧畜文化では用語が全然違います。ロシア語でも、牛は牝牛と雄牛で違うことばを使います。雄牛は「бык」、牝牛は「корова」ですね。日本語はどうですか？ 牛ということばの上に雄、牝をくっつけるだけで、特別なことばは持っていません。逆に日本ではお米を主食にしています。「お米 3 膳食べた」とは言いません。普通は「ご飯 3 膳」と言います。田

んぼに生えているのは稲と言います。先づきの稲穂にはお米が入っています。それが食卓に上ればお米ではなくご飯になります。ロシア語はどうでしょうか？ 田んぼに生えていようが、食卓に上ろうが、「рис」しかありません。これは一例です。文化が違えばことばのまとめ方が違うということが分かります。



そこで、ことばが違うとものの見方が違うということが生じてきます。実際に留学経験のある人、どうでしょうか？ ものの見方が違うということ感じませんでしたか？

(参加者)－「建物=здание だと思っていたのですが、ある建物について話していたら別のことばがあるということを教えてもらったことがありました。」

そうですね。辞書で単語を調べると、どのことばも意味は一つではないのです。一つという事はほとんどありません。だから私たちは辞書を引いてもどの意味を選んでよいか分からず、大変な苦勞をして勉強しているわけです。一対一で対応していることばはほとんどないはずで、90%以上がズレています。残り 10%くらいのズレてないのは何かというと、これは科学用語です。これはズレていたら困ります。学問の発展にも大きな障害が生じます。しかし日常なことばは、ほとんどがズレていると言われています。もっと大変なのは、先ほど川で釣りをしたように、日本人同士でさえ完



壁に同じイメージを持つのは難しいのに、ロシア人と日本人のコミュニケーションでここまでイメージがズレるのかということです。ある程度ことばができる人であっても、これはもう果てしなくズレてしまいます。つまり、あることばが持つイメージというのは文化的な背景によってかなり異なってくるということ

です。ここで先ほどの「ことばって何？」というところに戻ってきます。最初に「単語＋文法規則」は重要という話が出ました。確かにとても重要なのですが「単語＋文法規則」で異言語の学習ができるかといえば、それだけでは限らない誤解の連続という海に放り出されるということになるわけです。ですからことばが持つズレ、文化的背景、イメージを学ぶことなくして、異言語の学習はできないということが結論として言えると思います。一つ一つの現象を見てどう感じるかというのは、ことばが違えばかなり違ってきます。それを知ってはじめて少しはましなコミュニケーションができるのだと思います。

< 次号へ続く >

JIC ロシアセミナー講演録 2 (2009 年 11 月/東京)

過去へのまなざし、未来へのアプローチ

～現代ロシアの人気作家たち

沼野 恭子 (東京外国語大学教授)

続いて、東京会場での講演をご紹介します。東京外国語大学教授・沼野恭子先生にお話しいただきました。今回はその第 1 回です。

はじめに

今日は、ロシアで現役の人気作家として活躍している作家を 5 人取りあげ、作品の引用を交えながら紹介していきたいと思います。その 5 人とは、アクーニン、トルスタヤ、ウリツカヤ、スラヴニコワ、ペレーヴィンです。彼らの作品に描かれている内容が過去に向けられたものか、未来に向けられたものかという点に注目しつつ、現在のロシアでどのような小説が好まれているのか、人気があるのかということをお話したいと思います。

ちなみに、この 5 人は全員日本に来たことがありますが、そのうちの 3 人はついこの間、2009 年の秋に来日したばかりで、それぞれ講演やトークショーを行いました。その模様も少しご紹介します。

(1) 中間小説の戦略 ボリス・アクーニン

過去を扱った作品で人気を博している作家として、まずはボリス・アクーニンの名前を挙げたいと思います。アクーニンは、1990 年代の終わりから「ファンドーリン・シリーズ」と名づけた歴史推理小説を発表し、大ブレイクしました。彼はもと日本の歴史や文学の専門家で、三島由紀夫のロシア語訳が高く評価されている優れたジャパノロジストです。ペンネームの「アクーニン」というのも、ロシア語風に聞こえますが、実は日本語の「悪人」から名づけたものだそうです。

三島由紀夫だけでなく、現代日本作家の翻訳をしたり、日本文学アンソロジーを監修したりと長年日本とロシアの文化交流に大きな貢献をしてきたため、2009 年「国際交流基金賞」という賞を受賞しました。今ではすっかり人気作家になったため、日本文学の翻訳にたずさわる時間はほとんど無いようですが、作家としては相変らず次々にベストセラーを生み出しています。

ファンドーリンというのは探偵役の主人公



2009 年 10 月の授賞式
(中央、アクーニン氏)

の名前です。主人公は大変な美青年、今風に言うと「イケメン」で、緻密な推理と勘のよさで複雑な事件の謎を解いていくスーパーヒーローです。

舞台になっているのは 19 世紀後半。アクーニンは史実を綿密に調べあげ、それらをかなり正確に作品に反映させています。同時に、19 世紀ロシア文学をさまざまな形で取りこみ、単に謎解きだけを目的にした大衆娯楽推理小説というのではなく、読み応えのある「純文学」に近い上質のエンターテインメントに仕立て上げています。文学的に十分な質の高さを保ちながら同時にエンターテインメントとしても優れたものを書くというのは、アクーニン自身が当初から持っていた「戦略」で、それが狙いどおりに成功し、高い人気を得ています。エリートの純文学とエンターテインメントの大衆文学の中間的な位置を占めるという意味で、タイトルを「中間小説の戦略」としました。

19 世紀ロシア文学をいろいろ取りこんでいると述べましたが、例えばアクーニンの処女作『堕ちた天使 アザゼル』(原題「アザゼル」)の冒頭を見てみましょう。この小説は 20 歳の初々しいファンドーリンが登場し、生まれて初めて事件を解決するというものです。ここでは、ある有名なロシア文学の作品の、やはり冒頭部分が強く意識されています。ロシア文学をたくさん読んだことがある方は、どの作品を暗示しているか分かるかもしれません。

●引用；『堕ちた天使 アザゼル』(1999 年)

「1876 年 5 月 13 日の月曜日、午後 2 時すぎのこと、春らしくすがすがしい、夏らしくあたたかいこの日、アレクサンドロフスキー公園で、衆人監視のもと、何とも形容しがたい醜悪な事件が起こった。

並木道の植込みではライラックの花が咲きほこり、真っ赤なチューリップが燃えたっていた。その並木道を、着飾った人たちがのんびり歩いている。レースの日傘を、そばかすができないようにとかざす貴婦人、水兵服姿の子供をつれたベビーシッターの女性、チェビオット・ラシャでできたフロックコートか、あるいはイギリス風をきどって短めに仕立てたジャケットを着た退屈そうな様子の若者。これから不愉快な出来事が起ころうなどとはつゆほども感じられず、あたりには、いかにも春らしい爛漫の芳香が満ちあふれ、ものうげな満足感とうきうきするような倦怠感がみなぎっている。かんかん照りだったので、木陰にあるベンチというベンチはみなふさがっていた。

そうしたベンチのひとつに、ふたりの婦人が腰かけていた。人工洞窟(グロット)のほど近くに置かれたそのベンチは柵のほうを向き、そのむこうでニグリンナヤ通りがはじまっており、マネージ広場の黄色い壁



が見えていた。ふたりのうちの若いほうは——婦人というより令嬢と
いった方がいいだろう——モロッコ革の装幀の本を読みながらも、た
えず興味深そうにあたりをきよきよ見まわしていた。もうひとりはお
なり年配で、濃紺の上等なウールのワンピースに、実用的な編み上げ
靴をはいており、リズミカルに編み棒を動かしては、何やらどぎついピ
ンク色のものをせっせと編んでいる。それでいて、右に左にと首(こう
べ)をめぐる余裕もあるうえ、すばやく走らせる視線はたいへん鋭い
ので、ほんのわずかでも目立つものなら、何であれ絶対にその視線か
ら逃れることはできないだろう。

細身のチェックのズボンをはき、白いチョッキの上にはおったフロク
コートボタンをだらしなくはずし、丸いスイス帽をかぶった若い男
に、この婦人はすぐに目をとめた。というのも、並木道を行くその男の
歩き方がなんとも奇妙だったからだ。散歩している人を立ち止まってじ
っと見入っていたかと思うと、ぱっと二、三歩すすみ、またしても動かな
くなる、といった具合なのである。ふいに、その落ちつきのない男は、
われらが婦人たちを目にすると、まるでなにか意を決したかのように
大股で近づいていった。そしてベンチの前で立ち止まり、妙齢の令嬢
に向かってからかうような甲高い声で叫んだ。「お嬢さん！ あなたは
たとえようもなく美しい、と言われたことはありますか」

じっさい令嬢は素晴らしく美しかったが、ぎょっとしてイチゴのような
唇を心持ち開け、その厚かましい男をまじまじと見つめた。あまりに途
方もないぶしつけな男の態度に、一緒にいた年配の婦人まであっけ
にとられてしまった。」

どうでしょう、ロシア文学史上とても有名なある小説に似て
いるのですが、おわかりになりましたか？ そう、ミハイル・ブ
ルガーコフの『巨匠とマルガリータ』です。ブルガーコフは 20
世紀初めの大変優れた作家ですが、ソ連時代を不遇のう
ちに過ごし、自らの代表作を生前に出版することができま
せんでした。彼の畢生の大作『巨匠とマルガリータ』は現在ロシ
アで大変な人気なのですが、この代表作の冒頭部分にア
クーニンの『アザゼル』は構図や雰囲気がとても似ています。
ブルガーコフの作品では、ふたりの男がベンチに座ってい
て、そこへもうひとり男が登場し、この男が悪魔のような男な
のですが、ベンチの 2 人に絡んでくるという構図です。『ア
ザゼル』を読むと、「あ、ブルガーコフに似ているな」と思い浮
かべるような箇所が結構あります。実際、アクーニンは『ア
ザゼル』を描いた時に、ブルガーコフの『巨匠とマルガリータ』
を念頭に置いていたということを告白しています。ブルガー
コフだけではなくて、アクーニンの作品には 19 世紀や 20 世
紀のロシア文学のさまざまな作品、作品への言及や引用、
ほのめかしなどがレトリックを駆使して取り込まれています。

さらにこんな仕掛けもあります。主人公ファンドーリンの名
前はエラストといいます。エラストの恋人となるのは、先ほどの
引用でベンチに座っていた美しいお嬢さんですが、名前は
リーザといいます。エラストとリーザと言えば、何の作品で
しょう？ そう、これはニコライ・カラムジンの代表作『哀れなり

ーザ』の恋人同士の名前なのです。カラムジンのリーザは最
後、池に身を投げる悲劇のヒロインですから、アクーニンの
この作品でも、リーザに悲劇の運命が与えられているので
はないかと読者は推測することができます。

また、先程の引用部分の冒頭に「1876 年 5 月 13 日月曜
日」と時代の設定がはっきり語られていました。場所も明記
されています。作品ではこの年のロシアで、モスクワで起こ
った出来事や史実、社会的・文化的現象がきちんと取りあ
げられています。たとえば 1876 年には同時代の作家として、
ドストエフスキーが生きていて、「作家の日記」を書いて発表
していますが、それが引用されたりしています。

ファンドーリン・シリーズは全部で十数冊あり、日本語訳さ
れたものでは、他に『リヴァイアサン号殺人事件』、『アキレス
將軍殺人事件』があります。アクーニンの推理小説は、19 世
紀のロシア文学の香りを強く漂わせ、その格調高い文体を
引き継ぐことで、ドストエフスキー、トルストイ、トゥルゲーネフ、
チェーホフといった 19 世紀を代表するロシアの作家達が好
きだというロシア人、あるいは外国の読者を非常に惹きつけ
ます。純文学として非常に格調高い文体が文学好きのロシ
ア人に圧倒的な支持を得ている大きな理由になっています。
そこには、過去の偉大なロシア文学への深い愛情・ノスタル
ジーが感じられます。

【アクーニンの日本語訳作品】

『墮ちた天使 アザゼル』沼野恭子訳、作品社、2001
年刊

『自殺の文学史』越野剛・清水道子・中村唯史・望月哲
男訳、作品社、2001 年刊

『リヴァイアサン号殺人事件』沼野恭子訳、岩波書店、
2007 年刊

『アキレス將軍暗殺事件』毛利公美・沼野恭子訳、岩波
書店、2007 年刊

(2) 言葉の突然変異 タチヤーナ・トルスタヤ

次は、はるかな未来を舞台にした、タチ
ヤーナ・トルスタヤの長編を紹介しましよ
う。「言葉の突然変異」というタイトルにし
てあるのは、今から 200 年以上先の未来
を想定しているこの作品の中で、現代ロ
シアで使われている言葉がさまざまに変
形したり歪んだりしていて、作者自身がそれを「突然変異」と
呼んでいるからです。トルスタヤは、2001 年に日本で「ロシ
ア作家会議」という大規模なシンポジウムが開かれたときに
来日しています。この作家会議には、トルスタヤとともにウラ
ジーミル・ソローキンも参加しました。ソローキンは、今回紹
介する 5 人には含めていませんが、やはりカリスマ的人気のある
作家です。作家会議はトルスタヤとソローキンという現代
ロシアの人気作家がそろって壇上に登場した大変貴重な機



会でした。

トルスタヤは、1980 年代後半に『金色の玄関に』という 13 篇からなる短編集を発表して注目を浴びました。原題を忠実に訳すと「金色の玄関に座っていたのは」となりますが、日本語タイトルはちょっと



2001 年の作家会議での
トルスタヤとソローキン

短くしてあります。短編集が書かれたのは 1985 年前後。1985 年というと、ゴルバチョフのペレストロイカが始まった年です。それ以後、ソ連社会で民主化が進み言論の自由が広がっていきました。丁度そのとき現れたのがタチヤーナ・トルスタヤです。それまでソ連で公式に認められていた文学は社会主義リアリズムと呼ばれていました。テーマからしても文体からしても、彼女の作品は社会主義リアリズムとはまるで異なるものでした。トルスタヤは、世間から忘れられたような孤独で偏屈な人、知的な障害のある人、夢ばかり追って現実を見ようとしらない人などを主人公に取り上げます。そういう人々が自分だけのささやかな空想の世界を繰り広げるのですが、それが斬新な比喻(メタファー)を散りばめた華麗な文体で語られているのです。トルスタヤは何よりも言葉そのものにこだわる人で、その徹底的に言葉にこだわった密度の濃い装飾的な文章は、20 世紀初頭のモダニズムの時代を思い起こさせるものでした。

トルスタヤが 2000 年に発表した待望の長編小説があります。それが今日紹介する未来小説ですが、原文の題は《Кысь》といいます。

「Кысь(キューシ)」と読むしかないのですが、タイトルからして、ロシア語文法の破格になっています。ロシア語には正書法の規則というものがある、最初の к の文字と 2 番目の ы の文字とはロシア語では普通つなげて書くことができない綴りです。つまり、ロシア人がこのタイトルを見ると、何か奇異なもの、ロシア語らしくない、どこかエキゾチックな感じ、変てこりんな感じがするはずなのです。「Кысь」は長い小説でまだ日本語訳は出ていませんが、私はある雑誌にその一部だけ翻訳紹介したことがあります。その時、タイトルを「キューシ」と書くと日本語として違和感があまりない、もっと変な日本語文法を破壊するような題名はないかなと悩んだあげく、「ンニャー」というタイトルにしました。日本語ではふつう語頭に「ん」がつかないのが普通ですから、一目で日本語らしくないなと思ってもらえるでしょう。また、ロシア語では「キシキシキシ(Кис-кис-кис)」と言いながら猫を呼ぶので、「Кысь(キューシ)」と音が似ています。この音の類似から猫の鳴き声をイメージさせるような訳語にしてみたのです。この本の



表紙を見ても、猫に見えないこともないといった感じがしませんか？

さてこのタイトルの奇妙さは、小説のあちこちに散りばめられている奇妙な言葉や造語を象徴しています。では、どうして言葉は 200 年後の未来にそんなに変わってしまうのでしょうか？

●引用；『ンニャー』(2000 年)

「母さんはこの世に、230 年と 3 年、生きた。そして老いるということがなかった。ずっと血色のよい顔と緑の黒髪を保ち、そのままの容姿で永遠の眠りについた。それはこういうことだ。大爆発の起こった時にお陀仏にならなかった者は、その後いっさい年をとらなくなった。そういう後遺症だったのである。楔を打ちこまれたようなものだ。でも、そういう者はほんの数えるほどしかいなかったし、今ではみんな故郷の土となってしまう。ンニャーに骨抜きにされた者もいれば、ウサギの毒にあたった者もいるし、母さんみたいにホノオウリにやられたものもいる…。

それに対して、大爆発のあとに生まれた者の後遺症というのは、ちょっと違っていて、千差万別だった。両手が緑色の小麦粉をまぶしたみたいで、まるでアカザパンを捜してあちこち引っ掻きまわしたといった風体の者、エラのある者、雄鶏のトサカやら何やらがついている者。そうかと思えば、何の後遺症もなかったのに、年とってから目にニキビができたり、はたまた、人目につかない場所に顎鬚が生え出して膝まで届くほどになったり、あるいは、膝に鼻の穴ができたりする者。

ベネジクトはよく母さんに、いったい大爆発は、何故、何が原因で起こったの、と訊ねたものだが、母さんもしっかりは知らなかった。人間がヘーキと戯れているうちに、戯れが高じて大変なことになった、ということらしい。(中略)

……それはそうと、母さんは丘にやってきて石の上に腰かけると、しくしく、おいおい、仲良しだった麗しき乙女たちのことを思い出しては泣き、ショーテンを思い浮かべては泣き、熱い涙にくれるのだった。母さんの話では、どの通日もオスファルトというものでおおわれていたという。これは軟膏のようなもので、固くて黒くて、踏んでもずぶずぶ沈んでいけないんだそう。こうして、天気の良い夏の日に、母さんはすわって、泣きながら愚痴をこぼしたものだが、ベネジクトのほうは泥遊びをして型抜きをすることもあれば、スズシロを摘んで矢来のように方形に囲んで土に刺すこともあった。まわりは、どこまでも広々としている。丘が連なり、小川が流れ、温かい風が吹き、歩きまわれば草が揺れ、原野の上空、森の上空から青い山脈に向かって、まん丸いお日さまが流れていく。

私たちの町、故郷の国は、フォードル・クジミチスクというが、そうなる前は、イワン・ポルフィリイチスク、さらにその前はセルゲイ・セルゲイチスクだった、と母さんが言っていた。もっと昔はユージヌイエ・スクラードゥイ、そして、もっとずっと昔はモスクワという名前だった。」

というわけで、舞台は 200 年後のモスクワです。核爆発を思わせる「大爆発」が起こったために、200 年後の人間たちは変形して人間と動物を掛け合わせたようなミュータントとな

っていたり、後遺症が残っていたり、不思議な生態の植物が出現していたりして、同時に言葉も変化しているというわけです。「ヘーキ(兵器)」とか「ショーテン(商店)」「オスファルト(アスファルト)」というのは、ロシア語原文でもわざと歪んだ形で書かれているため、日本語でもカタカナで書いて少し変にしておきました。

この 200 年後の世界ではアスファルト道路が無くなっている。それで、アスファルトがまるで無い世界から見て、アスファルトというのはどういうものかということが説明しているというわけです。このように、ある物をまるで初めて見るかのように描写していく技法がトルスタヤは大変得意です。実はこういう技法というのは、20 世紀初頭に現れたロシア・フォルマリズムの理論の中で有名なキーワードになっている「異化」という概念に他なりません。つまり、ある物を見た時に、たとえば「机」を見た時すでに見慣れている物だと、視覚が「ああ、これは机」と最初から自動的に知覚してしまいます。ところがそうではなく、トルスタヤはその机という物をまるで赤ちゃんが初めて見るかのような新鮮な目で描写しています。机を初めて見たとき、四角くて、足があって、上に紙を置くところがあって…、という風に描写していくでしょう。そういった描き方をトルスタヤはしていきます。これがフォルマリスト達のいう「異化作用」になっているわけで、この作品の中でも、未来から現在を見ていろいろな物を異化しているわけです。現在というのは、私達が見慣れている物ばかりなのですが、「アスファルト」にしても「商店」にしても、それらが無い時代の人間が見ると、それこそ奇異な物に見えるはずです。そこ

で表現が異化されるという事になります。こうした文学的技法でトルスタヤの『ンニャー』は書かれています。

核爆発ですべてが破壊されてしまったため、トルスタヤの未来社会では人々は原始的な生活をしています。乱暴な言葉を使っているし、むしろ過去に退化しているようなところもあります。舞台は未来社会ではあるけれども、そこから現在と過去を透かして見ているというふうに言えると思います。しかも未来のこの国は独裁者に牛耳られてもいます。未来の独裁国家といえば、ロシア文学史上、思い浮かべるのはエヴゲーニ・ザミャーチンが書いた『われら(Мы)』という小説です。これは、もともとずっと先の未来ですが、やはり独裁国家を描いています。ザミャーチンの『われら』とトルスタヤの『ンニャー』は非常に相通ずるものがあります。つまり『ンニャー』という小説はアンチユートピア小説と呼ぶことができ、独裁的な一党体制にあったソ連末期の社会を批判し風刺しているとも解釈することができます。そういう意味で、トルスタヤの『ンニャー』は、未来を舞台にしていながら、過去も透かして見ているし、現時点のロシアをも批判しているという重層的で賢明な仕掛けになっています。この作品は、現代ロシアへの非常にシニカルな自画像にもなっているのです。

【トルスタヤの日本語訳作品】

『金色の玄関に』沼野充義・沼野恭子訳、白水社、1995 年
「夜」(沼野恭子編訳『魔女たちの饗宴』新潮社、1998 年刊所収)

『ンニャー』(一部)沼野恭子訳(『早稲田文学』2001 年 9 月号所収)
＜ 次号へ続く ＞

JICモスクワ通信vol.19 ロシアのクリスマス

ロシアのクリスマスは、欧米と違って 12 月 25 日ではなく、1 月 7 日となっています。なぜかと言いますと、ロシア正教(ウクライナ、ベラルーシも同様)は、旧暦(ユリウス暦)を使っているからです。新暦の 1 月 7 日は、旧暦の 12 月 25 日となっています。

私はロシアのクリスマスの前後、ウクライナに旅行に行ってきました。ハリコフ、ポルタワ、キエフ、リボフなどを訪れました。特に話をしたいのは、ポルタワ(中央ウクライナ)とリボフ(西ウクライナ)についてです。ポルタワを訪れたのは、クリスマスの直前、1 月 6 日のクリスマス・イヴでした。伝統的にその時期は短期断食にあたり、クチャという食事を頂きます。主に大麦とけし粒から作られていますが、もっと美味しくするために、砂糖、はちみつ、くるみ、レーズン、シナモンなどを加えます。日本のお米の



ように、大麦はロシアとウクライナでの豊穡の象徴となっています。

1 月 7 日はリボフに行きました。西ウクライナには昔の伝統が多く残っています。クチャを食べるとき、そのテーブルの上に、大麦と小麦の穂の束を立てて、テーブルの四隅にはにんにくを置きます。

リボフの中心にあるリーノク広場では、多くの人が散歩を楽しんでおり、屋外の舞台では様々なショーが繰り広げられ、クリスマスのお土産やグリューワイン、グロッグといったものが売られていました。面白かったのは、コリヤードキ(クリスマスの歌)でした。カフェでコーヒーを飲んでいた時、いきなり 12 歳ぐらいの男の子が 2 人カフェに入ってきて、何かの歌を歌いはじめたのです。その歌の内容は次のようなものでした。

——家畜小屋にキリストが生まれました。みんなは嬉しくなります。この 1 年、皆さんが豊かになりますように！

その後 2 人は、カフェにいる人々に近づき、「少しでもお金をください」と言っていました。昔はこれぐらいの年齢の子供たちにはご馳走をあげるのが普通だったようですが、最近はお金になったようです。(モスクワ トカチェンコ・ドミトリー)

エクメネの最果てへ —サハ共和国 冬の旅—

❁ 第4回 ❁ 岡本 健裕



バタガイの空港に着いた時、さぞかし寒いだろうと身構えていた私には、顔に刺さる空気の温度は拍子抜けするほど暖かく感じました。どうしたことなのでしょう。

空港は最低限の設備でできていて、エプロンも滑走路も未舗装でした。もっとも、カチカチに凍っているので舗装してあるのと大差ないのですが。もちろん到着ターミナルはありませんから、降りた飛行機からまっすぐ歩いて柵の小さな切れ目を出ると、もうそこは外です。

柵の外に、灰色のウアズ(YA3)製四輪駆動車が 1 台止まっていました。ヤクーツクの旅行会社のサルダナさんがあらかじめ手配してくれた車です。この先の案内をしてくれる男性ドライバーのアナトリーさんがにこやかに迎えてくれました。

アナトリーさんに早速教えられます。「今日は(マイナス)32℃、暖かいよ。昨日は 50℃以下だったけどね。」・・・いきなり残念なお知らせです。やっぱり、期待した寒さはそこにはなかったのです。しかもたった一日違いで 50℃台を逃したという事実が、いっそう悔しさを盛り上げるではないですか。ぬるい、ぬるすぎる！と某埼玉銘菓の CM みたいなセリフ(ローカルネタですみません)を頭の中で繰り返しながら車に乗り込みました。おや、現地旅行社のサルダナさんは、アナトリーさんとヤクート語らしき言葉で会話しています。私には一言もわかりません。いくつもの言葉を使いこなすサルダナさん、かっこいい・・・。

少し走ると、車はすぐにバタガイの市街にさしかかります。想像していたよりも大きな町並みに、少しひしゃげた木造の

建物が連なっています。車窓風景でひととき存在感を示しているのは、電信柱です。その見た目から「ハエタキ」などと俗称されるデザイン of 電信柱は、日本ではかつて鉄道線路脇によく見られましたが、今ではほとんど駆逐されてしまって、限られた場所で見ることができません。バタガイでは、そんな電信柱が町なかの目抜き通り沿いに延々と立っているのです。何とも壮観。素朴な木造建築群に不釣り合いなほど無骨な造形が、すぐ軒先で接しているところが、すごーくソビエト的で、イイ！

ちょっと残念ですが、バタガイの町は素通りします。全体に色彩の乏しいモノトーンの風景が続きますが、案外、人も車もたくさん往来があつて活気があるみたいです。おや、そう言えば、すれ違う車はみんなウアズ製だ！連載の第 1 回で、サルダナさんが言っていた通りです。サハではウアズの信頼性が高く買われているんですね。

ところで先ほど、木造の建物がちょっとひしゃげていると書きましたが、建物ばかりではありません。実は電信柱も結



構ばらばらの方向へ傾いているのです。これは、ロシア人やヤクート人がテキトーに建設したから、というわけでは(多分)ありません。永久凍土

の上に作られた建造物は、はじめはピシッと造ってあつても、だんだんとゆがんでしまうことがよくあるのです。

永久凍土はその名の通り、半永久的に融けない凍りついた土ですが、地表面まで全部凍ったままではありません。地下ある程度の深さまでは、気温が上がると融けます。永久凍土の上には、こんな風に夏に融け、冬に凍るサイクルを繰り返す層が乗っていて、これを活動層(active layer)といいます。この活動層が、地上の建造物をゆがめてしまうのです。地面は凍ると、凍上現象という隆起をすることがあります。日本でも北海道などでは、冬季の凍上現象は悩みのタネの一つで、建物を持ち上げたり、水道管をちぎったり、色々と思いをしていますので、イメージしやすい読者の方もいらっしやることでしょう。逆に、凍った地面は融ける際に沈下するという傾向も持っています。永久凍土上の活動層の場合、その変異量は大きくて、時に数 m に及ぶこともあります。しかも、こういった挙動は不均一に発生するので、活動層は毎年凍結と融解を繰り返すたびに、ぐにやぐにやと気ままな動きで



その形を変えていきます。まさに、「活動」層なのです。そんなところに、人工物を恒久的に設置するのがどんなに難しいか。そう、舗装道路だってうかつには作れません。すぐにズタズタです。そんな次第ですから、このとき私は案外立派な道路だなど感心しながらヴェルホヤンスクへの道を進んでいたのです。贅沢にも、大型車がすれ違える道幅がずっと続いています。それほどでこぼこしていない、快適な道路です。

「ずっとヴェルホヤンスクまでこんないい道なんですか。」

「まさか、すぐに悪路になるよ。」

前方からバスがやってきました。さっきからゆがんだ建物ばかり見てきたせいで、平衡感覚がおかしくなっているのでしょうか、バスまでが、ものすごく傾いて見えます。…と思ったら、本当に傾いていました。うーんさすがに、これは永久凍土のせいではないでしょう(笑)。

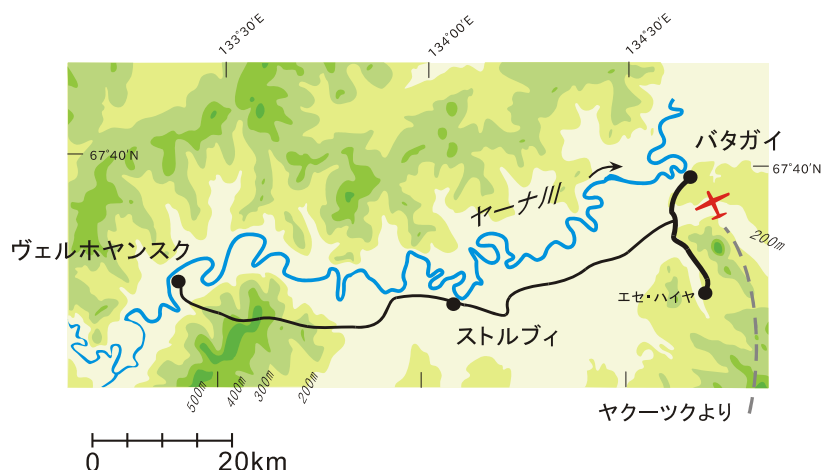
ところで、まさかバタガイにバスが走っているとは思いませんでした。車体はベラルーシのマズ(MAZ)製で、ソ連時代にかかなり広範囲に普及した小型のバスです。一体どこから来たのでしょうか。アナトリーさんに聞いてみると、すぐ近くから、とのこと。あとで地図を見ても、この先にはエセーハイヤという町があり、スズが採れる鉱山町ようです。私としたことが、全然知りませんでした。バスはここから来たのでしょうか。悔しいですが、いまだに判らずじまいです。

ほどなく現れた道路の分岐を右に曲がると、道はすぐに車 1 台分の幅へと狭くなりました。心なしか、路面の凹凸も多くなったように感じます。

「これが、ヴェルホヤンスクへの道だよ。」

と、アナトリーさん。一方、さっきの分岐を曲がらずに直進する道は、広くて立派なまま続くようです。その時はいぶかしく思いましたが、この先が鉱山町であるなら重量物の運搬のためにそれなりのインフラが必要なのも合点がいきます。少々道が悪くなったって、さすが我々の乗ったウアズはへっちゃらです。暖房もよく効きます(ちょっと効きすぎるくらい…)。真っ白な地面、葉のないまばらな灰色の樹木、曇天の空、という具合に、風景は単調です。そんな中を、たまに、巨大なウサギがちょろっと駆けていくのを、アナトリーさんが「ほら」と教えてくれるのですが、これまた全身真っ白なので容易には目が追いつきません。

今走っている経路の、地形の話をしておきましょう。バタガイの市街はヤーナ川の右岸にあり、およそ標高 150m から



200m の緩やかな斜面に広がっています。目指すヴェルホヤンスクはそこからずっと西方向、ヤーナ川を上流へ直線距離約 70km さかのぼったところ。ヤーナ川の谷はくねくねと激しく蛇行していて、標高 500-1000m 級の山々に囲まれています。日本人の目から見ると、ゆるやかな山容のためにほとんど高さを感じさせません。

車が進むヴェルホヤンスクへの道は、そんな谷の、氾濫原より少し高い丘陵の上に延びています。川の右岸を上流に向かって進むわけですから、川の位置は車窓右方向になります。でもそれなりに距離があるせいか、川は道中ほとんど見えませんでした。

植生はほとんど全部針葉樹林です。いわゆるタイガですが、樹木の 1 本 1 本が小ぶりで密度もまばらです。永久凍土上の樹林は活動層の範囲までしか根を張れません。ですから、樹木の大きさも活動層の厚みの制約を受けるのです。小さな木々の姿は、それだけこのあたりの活動層が薄い、つまり地表からかなり浅いところまで永久凍土が分布していることを示唆します。もちろん、気候や日照条件も植生を支配する重要な要因ですが。



40 分ほど走ると、視界が開け、平原の中に町が現れました。この町はストルビ(СТОЛБЫ)です。距離的には、バタガイからヴェルホヤンスクの間地点にあたります。あらかじめ地図で見た限りでは、かなり小さな集落だろうと勝手に想像していたのですが、なかなかどうして立派な町です。ここではちょっと立ち寄って、学校を見学させてもらえることになりました。

ロシアの学校(シュコーラ)は、義務教育が約 9 年間+中等 2 年間、ということくらいは知っていましたが、私は実際にその現場を見たことが一度もありません。生まれて初めて生で見るロシアの学校教育です。しかも、サハ共和国ヴェルホヤ

ンスク地区のストルブイという、かなり特殊な場所の！

案内された授業の現場は、想像をちょっと超えていました。ロシア語が全然、聞こえてこないのです。つまりそれは、ヤクート語…ですよね？ 恐る恐る、ロシア語で話しかけてみると、ロシア語で返事が返ってきました。今やってるのは、文学(リテラトゥーラ)の授業とのことです。なるほどー、文学の授業はヤクート語でやるのですね。ところが隣の教室、さらにその隣の教室からも、ヤクート語しか聞こえてきません。鈍い私もこの時点でようやく気づいてきました。サハ共和国の教育の本当のチカラに。質問タイムをいただいたので、先生に聞いてみました。

「もしかして、授業は全部ヤクート語なんですか？」

「もちろんです。」

「数学も、歴史も、全部ですか？」

「全部です。」

そんなの当たり前でしょ、と言わんばかりの反応です。

「では、ロシア語は全然使わないのですか？」

「使いますよ。『ロシア語』の授業でね。」

うん、そりゃそうだ。さっきから何だか自分がすこぶる間抜けな質問をしているみたいで、恥ずかしくなってきましたよ。

「教科書はヤクート語で書かれているのですか？」

「そうです。全部ではないですが。」

「ヤクート語の教科書を作る出版社があるんですね！」

「ええ、ヤクーツクにあります。」

ああそうか、これがロシア「連邦」なのだなと、改めてこの時思い知りました。この連載の第 1 回で少し触れたように、ヤクート語(最近ではサハ語とも呼ばれます)というのは、はるか西で使われているトルコ語とも親戚にあたる言語で、より詳しく言うと、チュルク諸語という言語系統に属します。サハ共和国の人口は全部で 100 万人弱ですが、ヤクート語話者は多くてもその半分に満たない 40 数万人といわれていて、それが日本の面積の 8 倍にもなる広大な領域に、絶海の孤島のように散らばっているわけです。要するに、話者の分布密度が、ものすごく希薄だってことです。そんな事情なのに、サハ共和国で教育に用いることばが、これほど徹底的にヤクート語で占められているとは、失礼ながら予想だにしていなかったのです。正直、ヤクート語のことなめてました。許してください。ヤクート語さん、本当すいませんでした。

見学させていただいた教室の生徒たちは、日本の小学校の中学年に相当する年頃です。はっきりした東洋系の顔をしていて、女性の先生も含めみんなよく似ています。7-8 人のクラスが全部で 3 つほどあるようで、全校生徒は 20 数名



というところでしょうか(そういう数字はちゃんと確認しておくべきでしたが、うかつにも聞き落としてしまいました)。

教室での授業をひとしきり見せてもらった後、別棟の食堂に案内されました。生徒たちは皆ここで昼食をとるのだそうです。私たちも、生徒たちの食事と同じ、温かいペリメニ(ロシア風水餃子)とお茶を、皆さんより一足早くご馳走になりました。至れり尽くせりで、どうにも恐

縮してしまいますが、このほかに、道中適当な食事処があるわけでもないの、ありがたく頂戴いたしました。

食事が用意されるまでの間、生徒たちが製作した工芸作品や絵画作品を見せてもらいました。寄木の絵、レリーフ彫刻など、そのレベルが高いのに感心する一方、題材にトナカイや馬などの動物がたくさん登場することを、おもしろく感じました。そうそう、特に馬は大事なので覚えておいてください。馬はヤクートの人たちにとって最重要動物です。後ほどたっぷり出てきますから(笑)。

さて、山盛りのペリメニ、本当においしかったです。ご馳走様でした。それにしても、なんという豊かさでしょう。このストルブイの学校、日本だったら、間違いなく僻地等級 5(マニアックな尺度を持ち出してすみません)に相当する場所ですが、この教育環境は、少なくとも初等においては真に充実と言ってい…。思いがけなく、いいものを見ました。それはもう、学校を後にしてからも軽く打ちのめされるくらいに。

学校での小休止を終えて再び出発です。外に出ると、通り沿いにコンクリートでできた建造物を見つけました。様式から言って、これは間違いなく旧ソ連の田舎に典型的なバス停です。…んっ、バスがこの道を通る？ アナトリーさんに聞いてみました。

「そう、それはバス停だけど、バスは走ってないよ。共産主義時代は走ってたけどね。」

やっぱりそうですか、今バスが通じていないのは残念ですが、かつて路線があつて、ここに停留所があったというのは、大変おもしろい情報です。



サルダナさんがこれからの行程を説明してくれました。

「ここからヴェルホヤンスクへは、山越えの道と、凍った川の上の道の

2 通りのルートがあります。川の道の方が状態がよくて快適なんです、山の道の方が距離が短いと、途中にあるシャーマンの木を案内したいので、山の道を行います。」

シャーマンの木？！それは楽しみです。

< 続 >



「私を歓迎してくれた日本とその素晴らしい国民の思い出を、私はこの世を去る瞬間まで抱き続けます。」

これは1975年9月、トルストイの末娘のアレクサンドラが知人に宛てた手紙の一節だ。ソ連からの亡命直後、1929年から1931年にかけて彼女は日本に滞在している。手紙の中で女史は昭和初期の日本を「奇跡の国」と称えた。そんな日本で、このたび本格的なトルストイの評伝が誕生した。しかもたった一人の手によってである。これを奇跡と言って差し障りがあるなら、私は偉業と呼びたい。

まず六百ページを優に超える分量に目を見張る。ずっしりと手に伝わるその重さは、偉人の人生の重みを象徴するかのよう。余程のトルストイ好きでないと、読むのに勇気がいるな、などと余計な事を考えながらページを繰っていくが、あにはからんや、ぐんぐん先に進む。非常に読みやすいのだ。また長年の緻密な研究と、地道なフィールドワークに裏付けされているので、内容が濃い。そして深い。それに、この種の伝記物に散見される変に入れ込んだ記述や美化もない。逆に、ときにユーモアを交えた語りは、読んでいて心地よくすらある。

本書を読み始めたとき、ふと、これはトルストイの「戦争と平和」だと思った。文豪にゆかりのある人々を、詳細に、そして生き生きと描き出し、見事な相関図ができあがっているからだ。これは、さまざまな人間関係に悩みながらも、誠実に生きた作家の人生を理解するのに大いに役立つ。カフカースへの脱走や農民女性との恋など、読み進むほどに読者の心には、等身大のトルストイの、愛と苦悩の姿が自然に浮かび上がってくる。

さらに、権力による学校の閉鎖、自殺の誘惑、神の探求や教会からの破門宣告など、中盤以降、トルストイの心の葛藤や内面のドラマが克明に描かれていく。こうして読者は文

豪の人生を、一部ではなく全体として追体験することになる。つまり、偉人の人生の「全貌」があますことなく解き明かされていくのだ。この功績は大きい。私自身も長年トルストイを愛読してきたが、正直、本書を手にして始めて偉大な作家の核心に触れた気が、そして全体像が見えた気がする。

繰り返しになるが、波乱に満ちたトルストイの人生の光と影を見つめ、最後まで文豪の実像に迫る冷静な筆致は素晴らしい。どうしてこんなことが可能なのだろう？それは、著者の藤沼貴氏が、すべての価値観が崩壊した第二次大戦後の焼土の中で、唯一の精神的支柱となったトルストイの文庫本との出会いから、一貫してトルストイを真摯に探求してきたからに他ならない。「一書の人を恐れよ」とはある哲学者の言だが、まさに「トルストイ」こそは、氏にとっての生涯の一書なのである。

さて、物語の名手であるトルストイが幼い頃に愛したお話に、「緑の杖」というのがある。これは、見つけた人はだれでも幸福になれるという杖が、森のどこかに隠されているというもので、幼いトルストイは兄のニコライと一緒に、故郷のヤースナヤ・ポリャーナの森中を探しまわったと言う。本書を読み、作品の真意が理解できたおかげで、今、文豪の作品の一つ一つが、改めて、私たちに贈られた「幸せの緑の杖」なのだという思いがする。

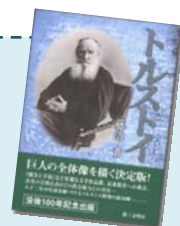
トルストイ生誕百八十周年(2008)と没後百周年(2010)の狭間の年に世に出た本書は、すでにトルストイ研究の必須の基本文献であると同時に、この作家の膨大な著作を読む際の、得がたき羅針盤になるだろう。いやそれ以上に、百年に一度の経済危機に襲われた時代の人々にとって、古臭い言い方かもしれないが、人生指南の書となるに違いない。

戦後の荒れ野にひとり立った著者が手にできたのは、トルストイの文庫本だけだった。だが、今の私たちにはこの書があると思うと、喜びが込み上げてくるのは私一人ではないはずだ。

<没後 100 年記念出版>

『トルストイ』 藤沼 貴著

第三文明社 6,300 円(税込)



スタニスラフスキー・ネミロヴィチ＝ダンチェンコ記念

国立モスクワ音楽劇場バレエ 日本公演

詳細はこちら！

<http://mam2010.jp>

◆日程◆

『オープニング・ガラ』 4 月 13 日(火) 19:00～

『エスメラルダ』 4 月 14 日(水) 19:00～

4 月 15 日(木) 14:00～/19:00～

『白鳥の湖』 4 月 17 日(土) 12:00～/17:30～

4 月 18 日(日) 12:00～

◆場所◆ Bunkamura オーチャードホール

◆チケット料金◆ JIC 会員特別割引です！

S 席 12,600 円 ⇒ 11,000 円

A 席 10,600 円 ⇒ 9,500 円 ※ただし座席指定不可です。

ご希望の方は、3 月 10 日(水)までに、電話または E メールにて、希望公演日・公演時間・枚数をご連絡のうえお申し込みください。

TEL: 03-3355-7295 (ダンチェンコ・バレエ係)

E メール: jictokyo@jic-web.co.jp (題名を「バレエチケット」としてください)



神戸市外国語大学語劇祭

ロシア語劇団 公演報告

神戸市外国語大学 福井麻美

まだ寒さの残る春、ある田舎町で終電を逃してしまった二人の若者、ブスイギンとシーリワ。何とか暖まれる場所を探そうと、彼らはあるアパートの一室を訪れる。そこには、父親は留守で、世間知らずの少年ワーセンカが一人。彼らの突然の訪問を怪しむワーセンカに、彼らはその場のしぎのどんでもない嘘をついてしまう。「実はブスイギンはお前の生き別れの兄貴なんだ」――

11 月 14 日、私たちロシア語劇団は、神戸市外国語大学・語劇祭にてヴァムピーロフ作の「長男」という作品を上演しました。神戸市外国語大学・語劇祭とは、大学内の 5 学科のそれぞれの有志が集まりそれぞれ劇団を形成し、各学科の専攻語で劇を上演する行事です。毎年、どの劇団も何ヶ月も前から練習に取りかかり、劇を作り上げます。



私たちロシア語劇団も語劇祭公演に向けて、8 月の末から練習を開始しました。今年の団員は 18 人中 17 人が女子学生で、当然男性役も女子がすることになり、宝塚のようでした。男性の仕草がなかなか上手くできなかったり、髪形や身長はどうするのか、など課題は山積みでした。また大道具作成も難題でした。女子ばかりで金槌やノコギリを使い、大道具を作りました。

まずはじめは、翻訳された日本語台本を手にも、役者の動きをつけていきました。ある程度動きがついて 10 月に入ると、次はロシア語のセリフを練習していきます。当然、日本語の



セリフでの練習のときのようにスムーズに進みません。自分のセリフが出てこなかったり、相手のセリフをとばしてしまったりするのです。特にセリフ量の多い役者は、人一倍セリフを覚えるのに苦労します。また、今まで台本を持っていた手が空いてしまい、どうすればいいのかと悩みました。

それらの問題をひとつひとつ解決しながら、本番に向けて練習していきました。本番が近くなってくると、団員全員がもう他のことは考えられず、語劇一色になっていきます。その感覚は毎年とても楽しいものです。練習を重ねるにつれて、

「私はシーリワのここのセリフが好き」、「私はブスイギンのここの動きが好き」など、全員それぞれお気に入りのセリフやシーンが出てきますし、裏方の学生ですら、役者の誰かのセリフの一部分を覚えてしまったりします。また、語劇で演じていた自分の役者名が、語劇祭が終わってもそのままあだ名として定着してしまった学生もいます。

11 月。大道具や衣装などが仕上がり、いよいよ本番が近づいてくると、全員に緊張感が走り、練習も大詰めになってきます。微調整や変更を繰り返し、OB・OG の方々の意見も参考にしながら劇を完成させていきます。

見ていると何気ない 1 シーンでも、実はかなりの時間と練習、そしてアイデアが詰まっています。見ている観客に伝えるように、楽しんでもらえるように、そして自分たちも楽しめるように、ということを中心に、ああでもないこうでもないという団員全員で意見を出し合い試行錯誤を繰り返してきました。

そして本番当日、上演中に観客席から笑いや拍手をいただき、劇は無事成功をおさめました。たくさんの拍手と「おもしろかった、楽しかった」といった意見をいただきました。それがどんなに嬉しかったかは言うまでもありません。そんな観客の拍手を励みに、



来年もまた語劇祭に向けて進んでいきます。「見ている人も自分たちも楽しめる」をモットーに、素敵な劇を団員全員で作りたいと思います。ぜひ一度見にいらしてください。

◆お知らせ◆JIC インフォメーションの電子化について
日頃は JIC インフォメーションをご愛読いただきありがとうございます。JIC では電子版インフォメーションの読者を募集しています。具体的にはメールアドレスをご連絡いただければ、PDF 形式でダウンロードできるように、毎号発行時に案内メールをお送りいたします。ご希望の方は E-mail アドレス「jictokyo@jic-web.co.jp」にご連絡ください。件名を「インフォメーション」とし、①お名前、②ご住所、③お電話番号、④メールアドレス に電子版インフォメーション希望の旨を書き添えてお送りください。よろしくお願い致します！

ロシア (旧ソ連圏) よりペンパル募集!

お友達をつくりましょう!

① **Chirkov Andrey** ② Male ③ 1987 ④ Russia, Blagoveshensk ⑤ kaizen@gmail.ru ⑥ photography, travelling, literature, sports ⑦ English, Russian

① **Yura Antnchik** ② Male ③ 21.10.1990 ④ Ukraina, Kharikov ⑤ healnichisan@mail.ru ⑥ Anime, Reading, Music ect.. ⑦ Russian, English

① **Kerdenskaya Maria** ② Female ③ 1992 ④ Russia, Penza ⑤ ka-mary@mail.ru ⑥ literature (Akunin, Bulgakov), Films, drawing, Japanese culture, music ⑦ Russian, English

① **Bekreneva Lena** ② Female ③ 1994 ④ Russia, Yakutsk ⑤ Leksa_rus@mail.ru ⑥ Music, swimming, Asian culture, dance ⑥ Russian, English

① **Vladimir Komyagin** ② Male ③ 11.09.1985 ④ Russia, Ufa ⑤ Ahades71@yandex.ru ⑥ Japanese culture, Japanese language, Anime, manga. ⑦ Japanese, Russian, English

① **Nesterenkov Alexei** ② Male ③ 1966 ④ Russia, Yroslavl ⑤ AlexeyMN@ruspromauto.ru ⑥ car ⑦ Russian, English

① **Nadya Kokovurova** ② Female ③ 1987 ④ Russia, Petrozavodsk ⑤ kokovurova@mail.ru ⑥ Drawing, reading, anime ⑦ English, Russian, a little bit Japanese

① **Zhelomsky Maksim** ② Male ③ 1980 ④ Russia, Moscow ⑤ varrkan@inbox.ru ⑥ drawing, reading, nature, anime, sports ⑦ Russian, English

① **Makhneva Galina** ② Female ③ 1992 ④ Ukraine ⑤ tinochka3@yandex.ru ⑥ foreign culture ⑦ English, Ukrainian, Russian

① **Tyunya Nikitinskaya** ② Female ③ 1993 ④ Russia, St.Petersburg ⑤ n-mk-3@mail.ru ⑥ anime, reading, History, travelling, party ⑦ Russian, English, Japanese

① **Khryptul Oleg** ② Male ③ 1978 ④ Ukraine, Kiev ⑤ dark.haron@gmail.com ⑥ books(fantasy, SF, classic), travel, strikeball, paragliding, science ⑦ English, Russian

① **Sivaev Maxim** ② Male ③ 1976 ④ Russia, Novosibirsk ⑤ sivaev@yandex.ru ⑥ history of Japan, travels ⑦ English

① **Fedyasheva Darya** ② Female ③ 01.07.1978 ④ Moscow ⑤ darya-fedyasheva@yahdex.ru ⑥ books, photo, music, new culture, travels ⑦ Japanese, Russian

① **Guseva Victoria** ② Female ③ 1988 ④ Russia, Ekaterinburg ⑤ vic-vic2@mail.ru ⑥ music, fantasy, football, travel, Japan, English, Japanese, German ⑦ English,

Russian, English

① **Kailin Victoria** ② Female ③- ④ Russia, Krasnoyarsk ⑤ ametist_87@mail.ru ⑥ anime, films, computer games, history, Japanese culture ⑦ Russian

① **Victoria Muradova** ② Female ③ 02.07.1980 ④ Ukraina, Donetsk ⑤ yponka@mail.ru ⑥ Japanese language ⑦ Russian

① **Anna Slavinskaya** ② Female ③ 1987 ④ Russia, Moscow ⑤ annaslav@list.ru ⑥ Social management, social problems,

social work, folk dance, pantomime, folk music, classical music, languages, philosophy ⑦ English, Japanese

① **Anna Zozulya** ② Female ③ 05.10.1982 ④ Flance ⑤ an.na@aliceadsl.fr ⑥ reading, teaching ⑦ Russian, French

① **Aleksei Sidorov** ② Male ③ 1985 ④ Russia, Kaliningrad ⑤ alex.kened@gmail.com ⑥ History of the middle Age, fencing, archeology, living history, music, animation, travel and much more ⑦ Russian, English

① **Irina Kotova** ② Female ③ 1978 ④ Russia, Smolensk ⑤ IRROR@rambler.ru ⑥ films, television, anime ⑦ Russian, or English

① **Blaznina Natasha** ② Female ③ 1985 ④ Russia, Moscow ⑤ love.in.autumn@hotmail.com ⑥ Hi! My name is Natasha, I'm 23 years old. I'm studying at the university, studying sociology. I like to roller-skate and bike, like walk in the park and go out from city. Interesting in culture of Japan, has recently started to learn Japanese language. I love to watch anime and dorama (´_`). I like different music. I want to find good friends, looking forward to the letters! ⑦ English, Russian

① **Strav Kristina** ② Female ③ 1983 ④ Switzerland, Geneva ⑤ kristina.strav@gmail.com ⑥ music, art, discovering new cultures, traveling, medicine, learning foreign languages ⑦ English, Russian, French

① **Padshakh Karina** ② Female ③ 1992 ④ Ukraina, Odessa ⑤ karina_flover@mail.ru ⑥ culture of foreign contries, pet, Japanese language, music, films ⑦ Russian, English

① **Elagina Elena** ② Female ③ 1992 ④ Russia, St.Petersburg ⑤ rena-giena@yandex.ru ⑥ Photography, manga, anime, reading ⑦ Russian, English

① **Balulo Valerij** ② Male ③ 1984 ④ Russia, Moscow ⑤



stodol@bk.ru ⑥ Sports: soccer; Music: house, trance, brit-pop; travelling, films ⑦English, Russian

①Kolcheganova Daria ②Female ③01.04.1994 ④Russia, Moscow ⑤ Spirit290@yandex.ru ⑥ sports and travel, studying foreign languages.⑦Russian, English

①Natalia ②Female ③22 years old ④Russia, Balashikha ⑤ demifiend@yandex.ru ⑥ Japan, Japanese culture, Japanese language, cooking, literature, art. ⑦English

①Komarova Arina ②Female ③31 Mar 1990 ④ - ⑤ rozenmaden@li.ru ⑥Anime, Music, Travel etc.. ⑦Russian or English

①Evmeshenko Maksim ②Male ③1991 ④Russia, Samara ⑤ pozdn9k@yandex.ru

⑥ Painting, Anime, Music(rock, metal, symphony, healing music) ⑦Russian & English

①Berlinova Ekaterina ②Female ③1992 ④Ukraine, Izmail ⑤ elfenliedlucy-nyuu-diclonius@rambler.ru, lucysan@yandex.ru ⑥Anime, listening to Japanese rock music, photography ⑦English, Russian

① Bogatsky Vyacheslav ② Male ③ 1978 ④ Russia, Stavropol ⑤ sb-26@rambler.ru ⑥ Technology, Car, Machine, Sports ⑦Russian

① Zykova Irina ② Female ③ 12 Mar 1985 ④ Russia, Chelyabinsk ⑤ anukis@yandex.ru ⑥ Japan ⑦ Russian, a little bit Japanese

①Yanishev Stanislav ②Male ③1990 ④Russia, Tuimazi ⑤Corvinis@yandex.ru ⑥Anime, Animals ⑦Russian

①Perminova Tatiana ②Female ③1987 ④Russia, Kirov ⑤ksanta@inbox.ru ⑥drawing, Anime, Medical science ⑦English

①Mironova Anna ②Female ③1988 ④Russia, Moscow ⑤ valyanic@ya.ru ⑥ Japanese language, dance, travel, reading, movie, airplane ⑦English, Russian, Japanese

① Dadychenko Marina ② Female ③ 1989 ④ Russia, Ekaterinburg ⑤ alice-pathfinder@mail.ru ⑥My interests and hobbies: Hand-made, reading, rock climbing, drawing and painting (a little), listening to music, some computer games ⑦Japanese, English

①Matveeva Valeriya ②Female ③29 Oct. 1987 ④Russia, Tyumen ⑤retinue@mail.ru ⑥I like reading, drawing and listen to music. ⑦Russian, English, a little bit Japanese

①Saifullin Ruslan ②Male ③1979 ④Russia, Orenburg ⑤ reef10000@gmail.com ⑥Literature, writing short story, swimming, skiing, skating, music ⑦English & Russian

①Baskova Tatiana ②Female ③1987 ④Russia, Moscow ⑤werewolf_ne@mail.ru ⑥Japanese culture, Japanese old tale ⑦English, Russian



JICのロシア語講座

4月から2010年度前期のロシア語講座がスタートします！
東京クラス・大阪クラスとも、アルファベットからはじめる入門クラスがありますので、今年から始めたい！という初心者の方もお気軽にお問い合わせください。

東京クラス 4月5日(月)から順次開講 前期17回

入門(月)	初心者の方対象。アルファベットから始めて1年かけてロシア語文法を勉強します。
初級(火)	ロシア語のやさしい読み物を使って、ロシア語や会話に慣れていきます。
中級(水)	テキストを使い、身近な出来事を題材にロシア語の表現力を高めていきます。
文学講読(木)	小説を中心に読みます。ロシア語学習歴3年程度以上の方対象。
時事会話(金)	新聞・ニュース・物語などを読みながら総合的なロシア語力を高めていきます。
使える会話①(土)	ビデオやテキストを用いて、高いレベルのロシア語を身につけます。上級の方対象。
使える会話②(土)	ビデオなどを用いて、日常生活や旅行で使うロシア語を学びます。初級～中級の方対象。

受講料: 全 17 回 51,000 円 (複数講座同時受講割引あり)

時間: 月～金 19:00～20:30

土①10:45～12:15 土②12:30～14:00

定員: 各クラス 4～8 名程度

会場: 国際親善交流センター 東京オフィス(東京・四谷)

詳細お問合せ・お申込は・・・JIC 東京へ

TEL: 03-3355-7287 E-mail: jictokyo@jic-web.co.jp

大阪クラス 4月12日(月)から順次開講 前期15回

入門(火)	アルファベットからスタートする初心者のためのクラスです。
初級(木)	文法を学びながら、単語だけでなく文章での会話にチャレンジしていきます。
中級(金)	読み物などを使って会話のバリエーションを増やし、表現力をつけていきます。
上級(月)	文法、会話力のある方へ。自分の意見をロシア語で言えるように訓練します。

受講料: 全 15 回 35,000 円 (学割あり)

時間: 月・火・金 19:00～20:30、木 18:30～20:00

定員: 1 クラス 5 名以上

会場: 国際親善交流センター 大阪オフィス(大阪・天満橋)

詳細お問合せ・お申込は・・・JIC 大阪へ

TEL: 06-6944-2315 E-mail: jicosaka@jic-web.co.jp



2~4月の予定



3月 6日(土)長期留学4月生 事前説明会(東京・大阪)
 4月上旬 JIC 長期留学生 出発
 4月上旬 JIC 東京 日本語講座スタート(予定)！
 4月 5日(月)JIC 東京 ロシア語講座 前期スタート！
 4月12日(月)JIC 大阪 ロシア語講座 前期スタート！

最新情報は JIC のホームページに
 随時掲載いたします。ご確認ください！

JICは頑張る人を応援します！

◆◆編集後記◆◆

もうすでに2月中旬。1月はあっという間に終わってしまいました。本当に早いです。最近、インフルエンザにかかってしまい久々に寝込みました。毎日マスク、手洗い、うがいを実践していたのに(!)です。気温の上下が激しい今日この頃です。皆様も体調にはくれぐれもお気をつけください。

(JIC 大阪 小西章子)

JIC インフォメーション読者の皆様こんにちは。今月号から編集のお手伝いをさせていただくことになりました。新年のスタッフ挨拶文以外ではここに書く事がなかったのも、少し緊張しています。まだまだ初心者なので、勉強しないとならない事ばかりですが、より一層読みやすいインフォメーション作りを心がけていきたいと思います。皆様とはこれから長いお付き合いになりそうですね。どうぞよろしくお願い致します。

(JIC 東京 白井真理奈)

* * JICのロシア語研修 * *

ロシア長期留学9月生・募集中

予価です！

【期間】2010 年 9 月より 10 ヶ月
 【締切】2010 年 6 月 15 日
 モスクワ国立大学 559,000 円 (授業料 10 ヶ月)
 サクト・ペテルブルグ 国立大学 504,000 円
 (授業料 10 ヶ月)
 ウラジスラフ極東大学 310,000 円 (授業料 10 ヶ月)
 * 上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金及び取得手数料などががかかります。



ロシア語個人研修(随時募集)

☆モスクワ・ダリパス社 1週間~4週間 (ホームステイ3食付)
 ☆モスクワ大学 3週間~長期 (大学寮1人部屋)
 ☆G&Rインターナショナル 1週間~長期
 (ホームステイ2食付/大学寮2人部屋)
 ☆ペテルブルグ・パートナー社 (ホームステイ2食付)
 ☆ペテルブルグ大学 1ヶ月~長期
 (大学寮1人部屋/2人部屋)
 ☆ウラジオストク極東大学 1週間~長期 (大学寮1人部屋)
 ☆ウラジオストク極東大学 1週間~1ヶ月 (ホームステイ2食付)
 ☆ビジット生活体験コース (ホームステイ3食付)

ロシア語グループ&個人研修(随時募集)

リデン&デンツ スイスの会社出資のロシア語学校。
 個人・グループレッスン。モスクワとペテルブルグにあり、インターナショナルな雰囲気。初心者より上級者まで。2週間より可能。基本はホームステイ2食付。詳細はパンフレットをご覧ください。



デルジャーヴィン・インスティテュート

全ロシアプーシキン博物館の協力により設立された学校で、18世紀の建物内で授業が行われます。アットホームな雰囲気でお勧めです。グループレッスン、1週間より可能。基本はホームステイ2食付。詳細はパンフレットをご覧ください。



◆ロシア留学旅行相談(東京・大阪各カ所)◆

ロシア留学・旅行のお問合せ・ご相談に応じます。お気軽にお越しください。

東京事務所 平日 10-18時 土曜 10-16時
 大阪事務所 平日 10-18時 土曜(6-9月のみ) 10-16時

留学・研修各種パンフレットは JIC へ
 ご請求ください。留学・旅行相談お気軽に！

~Jクラブ(JIC友の会)のご案内~

JICインフォメーションを年6回、またJICのイベント案内をもちろんお届けします。
 ご希望の方には入会案内をお送りいたしますので、ご連絡ください。会費は無料です。
 国際親善交流センター